

## ◇園長室の窓から◇



原口純子

「幼児教育は大切だ」とか「幼児教育の重要性」等々というところが、さまざまな場で、しばしば言われる。しかしその割に幼児教育の本質は理解され尊重されているとはいえないのではないだろうか、「重要性」が強調される、ということとは、逆に言えば、無視され、軽視され続けてきた証とも言えよう。——だれにも自明な小学校教育の重要性を今さら一所懸命強調することはあまりないのだから——

幼児教育に対する認識の甘さは、単に親の無理解とか、世間の無理解ということのみに限られるのではない。幼児

教育は、行政の面ですら、「幼児教育の重要性」とか「三つ子の魂……」などと口先では重要がって下さるが、実際にはよく理解されておらず、実質的には軽視されているのではないかとさえ思われることがある。

もっとも幼稚園に関する行政は市町村にまかされている部分が多く、地域差も大きいから、「私のところでは」という方が適当かも知れない。

ここで私の知っている公立園の例をあげながら本質的に幼児教育が重視され、尊重されるということはどういうこ

とかについて、現状の問題点をあげて検討を加えたい。

## 。量と質

就学前の就園率（保育所も含めて）の低いところよりも高いところの方が、幼児教育に熱心だという具合に、行政面では、幼児教育を重視している度合を数量的に見ることがある。このような場合、一般的には、幼児の就園率の高揚をもってその成果が上ってきていると判断されるであろう。高い就園率があれば、行政的には、実があがったと考えられるというわけである。確かに、行きたくても行く園が無いというのでは困るし、だれでも幼児期にふさわしい教育が受けられることはありがたいことである。量的な面では近年非常な前進を見たと言ってよいであろう。

ここでは、数の上での「重要視」を認めた上で、園をあずかっている当事者の立場から、実質の面で納得しがたい運用がなされていることを指摘し、質的向上の必要性を明らかにしたい。

まず、「幼稚園」や「幼児教育」は、教育行政の面で、他の教育機関である小、中学校とは比較にならない程軽く

扱われているように思われる。このような差異は、単に義務教育とそうでないものの差によるものではなく、幼児教育そのものに対する認識のしかたによるもののように思える。

## 。「兼務」の教育

国公立幼稚園長会に出席してみると大部分の園長は五十歳以上の男性であることに気がつく。このように国公立幼稚園の場合、園長はほとんど小学校の校長が兼務しているというのが実態である。兼務の園長ではたしてどれぐらいの人が、本気で幼児教育のあり方を考え、思索し、研究し、職員との保育について指導をおこない、保育内容や計画について論ずることが出来るだろうか。内容、方法、その他実質的の面に対しては教頭、主任にまかせて、帳簿や服務などに関する指導をして、その任をすませる場合が多いのではないかと思われる。

公立の場合、小学校長の異動に連動して幼稚園長も変わる。「今度の園長はチョークの持ち方と板書のしかたを指導してくれた」とか、「環境の整備が大切だといってまず

第一に黒板を全部ぬりかえた」等の話を時折耳にするにつけ、どこか幼児教育にとってピントの合わないものを感じるのはいたしかたのないことだろうか、また、熱心な兼務園長は、主任にまかせず、教育要領をざっと読み、六領域をそっくり教科のようにとらえて、ガッチリした時間割のような教育課程を組んで、現場の先生が困りはてているという話を聞いたりすることもある。あまたある兼務園長の中には幼児教育を十分理解され、すばらしい保育を指導されている方ももちろんいることと思う、しかし兼務制には制度に伴う問題点もあるのではないだろうか。

幼児教育百年といわれる今日、数の上では飛躍的に伸びたものの、保育そのものがいっこうに育たず、遅々とした歩みを続けている。これはさまざまな原因があろうが、保育を考え、指導すべき立場の園長を兼務ですませてきたことにその一因があるのであるまいか。

園長自身、よろこんで兼務しているというより、若干の手当といっしょに幼稚園をおしつけられて、その任を負わされているというのが実態ではないだろうか。

兼務が多いのは、人権費の節約と、人材不足をカバーするためのものと考えられる。しかし、できる範囲からで

も、園長の専任化をすすめ、同時に園長になりうる人材を育てていく必要がある。この意味で、今後、四年制の大学を出た男性、女性の採用をすすめていくことも一つの取るべき方法であろう。

### ○園長の仕事

同じ園長といってもピンからキリまでである。私の近くの他の公立園では園児数は二四〇人、学級数は六あり、二年保育をおこなっているが、職員数は園長と教諭六名、その他の職員（用務員）一名の合計八名である。一人の先生がかぜで休めば園長はたちまち保育に当らなければならぬ。一日や二日はともかく一週間ともなればその負担は大へんなものである。事務職員もいないから、物品購入の伝票の切り方、役場との行き来、来客の応対、PTAその他の渉外、経理、それに加えて、プリントの仕事から、はては手が足りなければ、草ぬきやガラス掃除までしなければならぬ。その上本来の経営管理・保育の指導など一切の仕事が園長のかたにのしかかって来る実状にある。小学校で六学級二四〇人といえば、単級で小規模であるにして

も、教頭も事務職員もなしということはないと思う。もともととなりの市ではほぼ同じ規模の幼稚園でも教頭も事務職員も、担任外の教諭も、専任園長もいるのだから、園長が事務職も、雑用も、時として保育も兼務しているのは私のところの特殊事情かも知れない。

一日中、事務と雑用にふりまわされて、手いっぱいになり、充実した錯覚をおこして、これ以上保育のことなどとも考えられないという本末顛倒が起ってしまう。これでは兼務同様、園長不在の園になりかねない。

事務職員や、担任外の職員等、必要な職員の配置がのぞまれるゆえんである。

### 。一クラスの人数

昨今、研究会のテーマに「ゆたかな人間性を培う教育」とか「ゆとりと充実」ということばを聞く、いかにも耳ざわりのよいことばである。しかし、一クラス四〇人の定員の方はそのまま、スローガンやテーマだけが伸び伸びとしているのはどうしたことだろう。

現実を振り返ってみると、四歳児が四〇人一クラスにい

て、一人一人の自己充実とか、ゆたかな人間性を培ったりすることが可能なのだろうか。行政の不備が現場の先生や子どもにしわよせされているといえよう。にもかかわらず、先生方は、保育内容をよくしよう、一人一人の子どもに充実した経験を持たせようと汗み、どろになって動き、努力し、反省しつつがんばっている。先生方の涙ぐましい努力の上に日本の幼児教育は成立しているのである。幼児教育がよい効果をもたらすためには一学級の定員は多くても三〇人から三十三人程度におさえることが望まれる。

### 。職員の給与

教諭にその経験にふさわしい給与が支払われることは大切なことだ。私の住んでいるところでは、本年度採用された人はどうしたとか六年経験のある人も四年経験のある人も等しく三号俸しか与えられていない。女の人が給与の査定が低いと文句をつけると、「お金にこだわる人だ」などと小さな町ではたちまち悪評が立ったりするが、私は自分の労働や経歴にふさわしい代賃を請求するとはいささかもみっともないことではないし、当然のことだと思う。ま

た低すぎる給与は働く意欲にも影響して、力いっぱいがんばろうと思えなくなってくる。

市町村における職員の給与の実態及び具体的運用を県または国は把握しているのだろうか。ついでにいうなら、私のところでは、条例にないとの理由で、園長に管理職手当も支給されず、責任だけは一人前に負わされている現状である。

私などは地域社会の幼児教育の向上への意欲と情熱でひたすら奉仕している気持であるが、情熱などというものは揮発性に富んでいるからそう長くつづくものではない。適切な賃金のうらづけのない労働は時として情熱を失わせ、ことなかれ主義のマンネリ化へとおしながす原因となることを自治体の責任者は認識すべきであらう。

### ○指導主事

行政が幼児教育にかかわる具体的施策は、予算と人事が中心である。

上は文部大臣から末端は各園の教諭の採用人事まで、人事は行政の要の一つである。公立園の場合、文部省―県教

育庁―各教育事務所―教育委員会―幼稚園、という指導の系列は強力で明解である。上からの「指導」一つで現場は右へも左へもゆすられる。

各園を巡廻して具体的な園の保育の指導に当る指導主事が、どうしたことか、幼児教育の専門家ではなく、この春まで中学校の校長をしていた方で、異動によって事務所に入り幼稚園の担当になったりしている。「幼稚園は初めてですがどうぞよろしく」などと挨拶されて目を白黒するのは現場である。任に当られた先生もさぞかし困惑されたことと思う。付焼刃で勉強はするものの、現場に「指導」に行つて帳簿やはんこのおし方、書類の整理などについては指導できるが、保育についてトンチンカンな質問や指導をして、先生方のひんしゆくをかたりする。根のやさしい幼稚園の先生に「幼稚園は初めてですつて、しょうがないわよ」などといわれて、時として指導を受けて帰ったりする。

こういうことがごく普通に見られることから考えると、どうも行政が本気で幼児教育を重視しているとは考えにくいと言わざるをえない。人材は確かに少ないかも知れない。しかし、本気で探せば一つの県に何人かは幼児教育の

専門家がいないのだろうか。

### ○もっと現場の声を聞いて下さい

私の住んでいるところは人口流入の激しい新興住宅地域である。従って新しい園が次々と新設されるのであるが、園の設計にも、設備・備品等物品の購入にも、現場の声はほとんどとりいれられない。園舎は超モダンで斬新な設計で、一億何千万とかけた、壁も天井も立派な建物ではあるが、保育室から園庭が見えないように設計されており、子どもも先生も生活しにくい構造になっている。このような建物は、現場で保育に当る者の立場から非常に望ましくないものである。

保育とか、幼稚園の実態をまるで知らない設計者が、今までにない、夢のような、きれいでかわいい幼稚園を設計したと思えない。お子さまランチのような建物は子どもにとってもありがたいものではない。建物が今後二十年から三十年は使い続けるものであることを、考えると、設計は幼稚園教育の専門家の意見を取り入れて、もっと慎重に行なってほしいものである。

### ○むすび

これまで私の幼児教育への関心は直接の保育行為についてのものであった。保育方法、保育内容の改善こそ、幼児教育を向上させるものだと考えてきた、しかし立場が変わると、それらはたしかに欠くべからざる大切なポイントの一つではあるが、とてもそれだけでは解決できないことがわかった、より根本的な人事や予算を司る行政のありかたに、無関心では済まされない重要な問題があるように思う。幼児教育に対する行政面からの深い理解を切に願うものである。

